

泉 新 田 野 馬 堀

- 千葉北部地区泉新田野馬堀埋蔵文化財調査 -

平成16年3月

都 市 基 盤 整 備 公 団

財団法人 千葉県文化財センター

いずみ しん でん の ま ぱり
泉 新 田 の 馬 堀

－千葉北部地区泉新田野馬堀埋蔵文化財調査－



序 文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

この度、千葉県文化財センター調査報告第492集として、都市基盤整備公団千葉地域支社の千葉北部地区新市街地造成整備事業関連に伴って実施した印西市泉新田野馬堀の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

今回の調査では、小金五牧の1つである印西牧の一部を明らかにすることで、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成16年3月

財団法人千葉県文化財センター

理事長 清水 新次

凡　　例

- 1 本書は、都市基盤整備公団による千葉北部地区新市街地造成整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県印西市草深字大木戸1878-3ほかに所在する泉新田野馬塚（遺跡コード231-018）である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、都市基盤整備公団千葉地域支社の委託を受け、財團法人千葉県文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の担当者及び実施期間は、第1章に記載した。
- 5 本書の執筆は、上席研究員 谷鹿 栄一が担当した。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、都市基盤整備公団千葉地域支社千葉ニュータウン事業本部及び印西市、印西市教育委員会ほか多くの方々から御指導、御協力を得た。特に印西市教育委員会からは泉新田野馬塚の地形測量図を借用した。
- 7 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。
第1図 国土地理院発行 1/50,000地形図「佐倉」(NI-54-19-14)
- 8 周辺航空写真は、京葉測量株式会社による昭和44年に撮影のものを使用した。
- 9 基準点測量及び地形測量は日本測地系に基づいて行われた。
- 10 本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。

本文目次

第1章 はじめに	1
第1節 調査の概要	1
1 調査の経緯と経過	1
2 調査の方法	1
第2節 遺跡の位置と環境	1
1 地理的環境	1
2 歴史的環境	2
第2章 泉新田野馬堀の調査	3
第1節 遺構	3
1 調査成果	3
第3章 まとめ	5
報告書抄録	卷末

挿図目次

第1図 泉新田野馬堀位置図	2
第2図 泉新田野馬堀第1・第2トレントレンチセクション図	4
第3図 泉新田野馬堀地形測量図及び発掘区範囲図	6
第4図 泉新田野馬堀周辺地形図	7~8

図版目次

図版1 遺跡周辺航空写真 (約1/10,000)	
図版2 野馬堀近景 (南西から)、野馬堀第1トレントレンチ (北西から)、野馬堀第2トレントレンチ (西から)	

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

1 調査の経緯と経過

泉新田野馬堀の調査は、都市基盤整備公団千葉地域支社の千葉北部地区新市街地造成整備事業に伴うもので、今回、開発区域外ではあるが市街地造成工事に関連して、野馬堀を含む一部範囲が工事の影響を受ける事業が計画されたため、千葉県教育委員会と都市基盤整備公団千葉地域支社との間で取扱いについて慎重に協議した結果、事業の性格上やむを得ず記録保存の措置を講ずることとなり、財団法人千葉県文化財センターが発掘調査を実施することになった。野馬堀のうち工事にかかる部分の発掘調査は事業との調整をした上で平成15年度に実施する運びとなった。

泉新田野馬堀の発掘調査と整理作業の期間及び調査体制は以下のとおりである。

平成15年度

期 間	平成16年1月6日～平成16年1月16日
組 織	北部調査事務所長 古内 茂
	担当職員 上席研究員 谷鹿 栄一
内 容	発掘作業
	上層 66m ² / 330m ² (本調査)

期 間	平成16年1月19日～平成16年1月30日
組 織	北部調査事務所長 古内 茂
	担当職員 上席研究員 谷鹿 栄一
内 容	整理作業 水洗・注記～報告書刊行

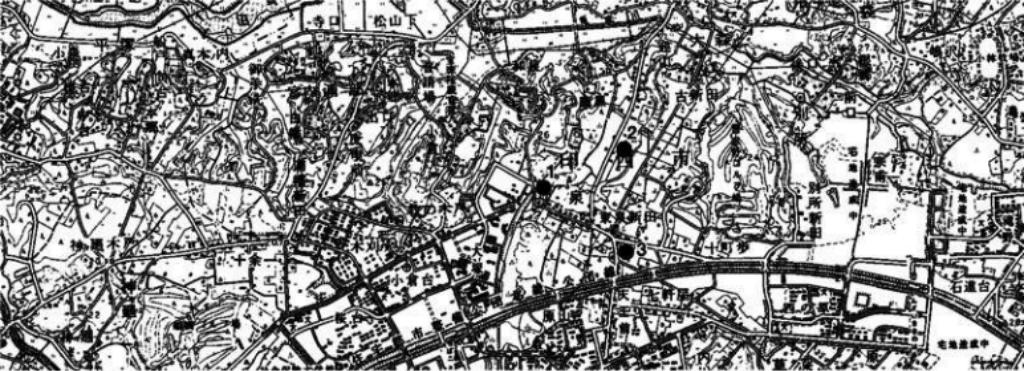
2 調査の方法

調査対象範囲全域に公共座標に合わせた通常のグリッドの設定は行わず、野馬堀に直交して比較的木根が少なく遺存状態の良い2地点を選び2m幅のトレンチを設定した。座標杭はこの2つのトレンチの基点となる箇所の両脇に4点設定し、印西市教育委員会から借用した地形図の公共座標にその座標をおとして位置がわかるようにした。

第2節 遺跡の位置と環境

1 地理的環境（第1図、図版1）

泉新田野馬堀は小金五牧のうち最東部に位置する印西牧の一部で、下総台地北部の印西市に所在する。印西市の北側は利根川を介して茨城県に接し、また東方には印旛沼、西方には手賀沼と三方を水で囲まれている。市域の大半は地形的には下総台地上に含まれるが樹枝状に開析された谷がよく発達しており、調査地も利根川に流入する亀成川の支谷が北東から入り込んで開析した谷津に面した西側の標高22m～25m



1 泉新田馬堀 2 割野野馬土手 3 天王脇野馬土手

第1図 泉新田馬堀位置図 (S=1/50,000)

の台地縁辺部にあり、調査地北東端と支谷低位面との比高は5mほどでなだらかな斜面を下りると支谷の低地に至る。付近には支谷を一つ隔てた東側の広い台地を南北に分断するように造営された割野野馬土手や南東にはコの字に曲がった天王脇野馬土手、西には手倉山野馬堀などが知られている。

2 歴史的環境

印西牧に關係した発掘調査には新井堀Ⅰ野馬土手、大森割野野馬土手などの調査例が知られる。

印西牧が位置する北総地域は、古代より牧が經營されてきた。その様子は『延喜式』の中に「下総五牧」と記述されているように、雜木林と草地におおわれた比較的平坦で広大な台地を利用して行われてきたようである。古代の記事についてその内容を立証することは難しいが、中世にはいり永禄年間の頃になると野馬についての記述が史料にみられるようになる。当時小田原北条氏の傘下にあった千葉胤富関係の文書に下総牧の野馬についての記述があり、この頃下総牧が千葉氏の支配下にあったことを示している。これは、軍馬を育成することが主な目的と考えられる。その後、江戸幕府は慶長十九（1614）年に、軍馬の飼育と供給を目的として江戸周辺に幕府直轄の牧を設置し綿貫氏を野馬奉行に任命した。牧は下総に小金牧、佐倉牧、安房に嶺岡の三か所があり、下総台地には小金牧・佐倉牧の二牧がおかれた。小金牧には元和二（1616）年には牧士を任命して牧の実質的管理者を置き經營にあたらせた。当時の小金牧には、中野牧、下野牧、庄内牧、高田台牧、上野牧、印西牧、一本門牧の七牧が設置されたが、その後一本門牧は中野牧に吸収され庄内牧はなくなったため、江戸時代中期以降は小金五牧となった。それまで牧はすべて綿貫氏の支配下にあったが、八代將軍徳川吉宗の時代の享保七（1722）年には幕府は積極的に牧の經營をするようになり牧支配の改正も行われて、下総牧は老中支配から若年寄支配にかわり、小金牧のうち中野牧と下野牧の二牧は野馬奉行の綿貫氏の支配から幕府の野方代官支配下に置かれるようになる。牧の整備が本格的にはかられたのはこの享保年間で、野馬土手も築かれた。印西牧の野馬土手はすべて自普請で、公儀普請の野馬土手はなかった。牧には木戸と呼ばれる施設が設けられ、馬の逃亡の防止や通行人の人別改めを行った。このように江戸時代、馬は高価で重要なものであったので厳しく管理されていた。また幕府は享保の経済改革のなかで牧の効率的な經營にも着手し、牧の周辺部を解放して数多くの畑作新田を開拓した。印西牧でもその東半分が印西十七新田として新田開拓が行われ、放牧馬の逃亡を防いだり、野犬などから馬に危害が及ばないようにするために馬土手も築かれ、点在する村々や農耕地との区切りとした。享保期、寛政期の改革を通して牧馬の増産策が積極的に行われ、牧は明治期まで使用された。

第2章 泉新田野馬堀の調査

第1節 遺構（第2・3・4図、図版2）

今回の調査は、現存する約190mの野馬堀のうち北東部分の330mが対象である。対象となる野馬堀は、南西から北東に向かって西側の広い台地平坦部と東側谷部との境の縁辺部に谷に平行するように直線的に造営されており、堀を掘り込んだ土を堀の両脇に30cm～40cmの低い土手状に積んでその間に野馬堀が一条という構成になっている。この土手は台地の平坦部を谷側に延ばすような盛土となっており、谷側の土手状に盛られた土は低地から見ると1.1mの高さがある。

現況では土手状に積んだ土の間の距離は約3mを測り、土砂が風や雨で運ばれて埋まってしまっているが山側から堀の底までの深さは約2m、谷側からでも1.2mを測る。これが調査によって造営当時の堀は、深いところで山側の盛土の上から3m近くあったことがわかった。野馬堀は標高約24.5mの台地平坦面から17mの低部まで続き、旧水田に近い所で不明瞭になって消えている。標高差は7mほどである。調査はこの野馬堀にはほぼ直交するようにトレンチを2か所設定しそれぞれ第1トレンチ、第2トレンチとして調査した。その結果については以下のとおりである。なお、遺物については全く出土しなかった。

1 調査成果

第1トレンチ（第2図）

野馬堀の最も標高の低いあたりで、野馬堀が周囲の地形と重なって不鮮明となる標高20mから18m付近に設定した。この地点は地形そのものが北西から南東にむかって傾斜し、標高17mあたりから傾斜の角度が鋭くなるところで、谷側の盛土の痕跡のある形状の最も標高の低い所にあたる。

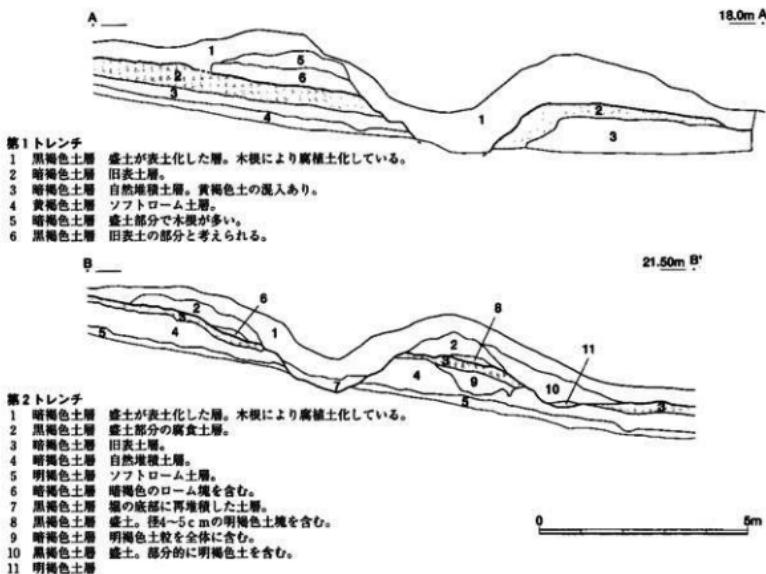
堀の両側の長さは約6mを測る。盛り土は台地側では旧表土上に三層にわたって確認できた。最上部の土層は第1トレンチと同様に黒褐色土層が60cmあり、その下に暗褐色土層が40cm、その下に黒褐色の土層が40cmの厚さで盛土されていた。盛土はほぼ水平に盛られており、その下には50cmの厚さの旧表土層が続く。旧表土下の土層は自然堆積層で間層を挟んでソフトローム層となる。また、谷側では黒褐色土層が1.1mの厚さに盛られている。その直下は旧表土層となる。谷側のトレンチ基底部からは旧表土下の暗褐色土層が60cm以上にわたって堆積していたが、ソフトローム層に相当すると考えられる層は確認できなかった。旧表土上の盛土は山側では約60cm、谷側では1mおよび、堀の幅は上部で6.5m、底部に近いところでは1.8mを測る。堀は約80cmの厚さに土が堆積し埋まった状態であったが、台地上から堀の底部までは3mを測る。野馬堀の形状はトレンチ断面図では間のびしたMの字を呈する。

第2トレンチ（第2図）

標高22m～19mの台地斜面部に設定した。野馬堀の台地側と谷側の堀両端の土手と土手の間は6.5m、堀の深さは台地上からは1.7m、谷側からは約1.1mを測り、堀の両側の盛土と盛土の間は11mを測る。

第1トレンチは、雑木と竹の根が縦横に張っていて表土と盛土の境界が不鮮明であるが、最上部に約20cmの厚さで暗褐色の表土層が堆積し、盛り土はその下部に黒褐色の層が厚さ30cm、幅2.5mほどの範囲に地形に合わせるように南東に傾きをもって盛られている。その直下の層の堀側には旧表土層の上にレンズ状に明褐色のローム塊を含む暗褐色土を約15cmの厚さに積み上げている。ローム塊を混入させていることか

ら土層の崩落を防ぐために盛ったものと考えられる。その下が旧表土で旧表土は山側では現表土の下50cm、谷側では80cmの位置に20cmの厚さで確認できた。旧表土の堆積状況は緩やかな傾斜で谷に向かって行く状態が見て取れる。旧表土直下の土層は傾斜地形なので自然堆積の土層とは異なるが、暗褐色の土層で50cmほどの厚さに南東方向に傾斜しながら堆積し、その下にはソフト化したローム層がみられた。また、谷側の旧表土下に黒褐色の土層が観察できた。この層は土層の観察から人為的に掘削された痕跡というよりは、豪雨などの雨水によって穿たれた溝状の窪みに土砂が堆積したものと考えるほうが妥当であろう。



第2図 泉新田野馬堀第1・第2トレンチセクション図 (1/120)

第3章 まとめ

今回調査対象となった泉新田野馬堀は印西市和泉地区にあり、現在でも直線的に南西から北東方向へ165mほど良好な状態で遺存している。土地の古考の話では、戦前は多田羅田の谷津まで野馬堀が続いていたとの事で、その話から推定すると、さらに100m以上野馬堀が続いていたことになる。この野馬堀は、構造的には二重の土手の真ん中に堀を一条掘ったもので、牧側の土手は小さく、そしてその間に堀を掘り、村側の土手を大きく築いている。これは牧から村へ馬が逃げるのを防ぐことを主目的とするもので、トレーナーのセクション図等から掘り込んだ土を堀の両脇に積み上げ土手にしたものと考えられる。

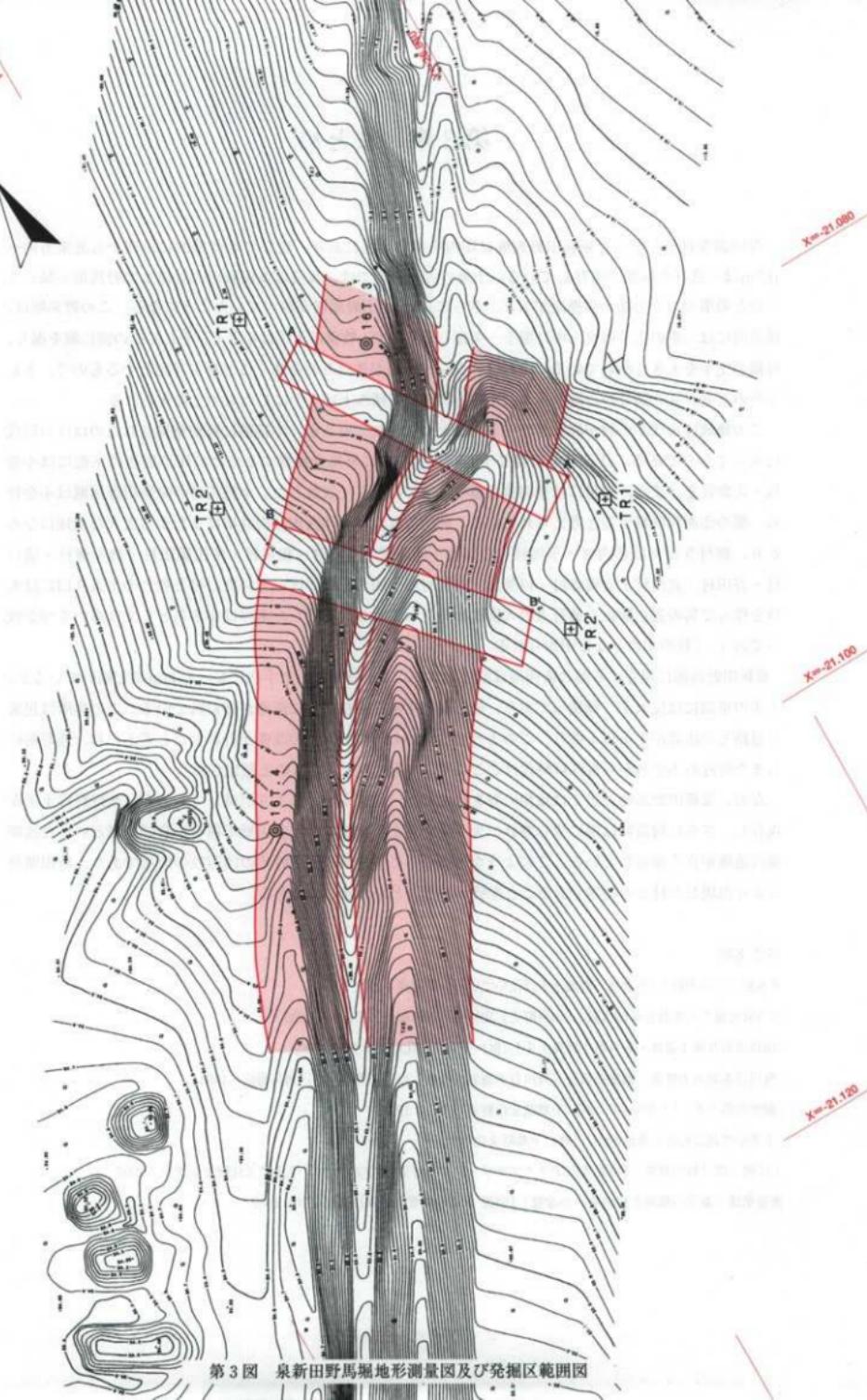
この地域は古代から牧が經營されてきたことが知られているが、本格的に牧が整備されたのは江戸時代に入ってからである。江戸幕府は慶長十九（1614）年に軍馬を飼育するために江戸周辺の下総には小金牧・佐倉牧を、また、安房には嶺岡牧を幕府直轄の牧として設置した。本報告書の泉新田野馬堀は小金牧の一部の印西牧に属すると考えられている。印西牧は現在の印西市と白井市にまたがる広大な地域にひろがり、野付き村々は名内村・平塚村・白幡村・浦部村・小倉村・和泉村・多田羅田村・神々廻村・清戸村・谷田村・武西村・安養寺村・戸神村・布佐村の十四か村にのぼっていた。村と牧との出入り口には木戸を作って馬の逃亡防止や通行人の人別改めを行っており、こうした木戸は小字名として今もいくつか残っており、「牧の木戸」などが知られる。

泉新田野馬堀に現存する堀の南西端は堀が切れて、1mほど高い土手状になって30mほど続いているが、土手の東側には民家が二棟建っており、その民家を廻り込むように道路が作られている。この場所は民家と道路との比高が1m以上あり、このような状況からかつて土地の改変が行われたと考えられ、地形的にもまた付近の小字名からも江戸時代はここに木戸が置かれていたものと想定される。

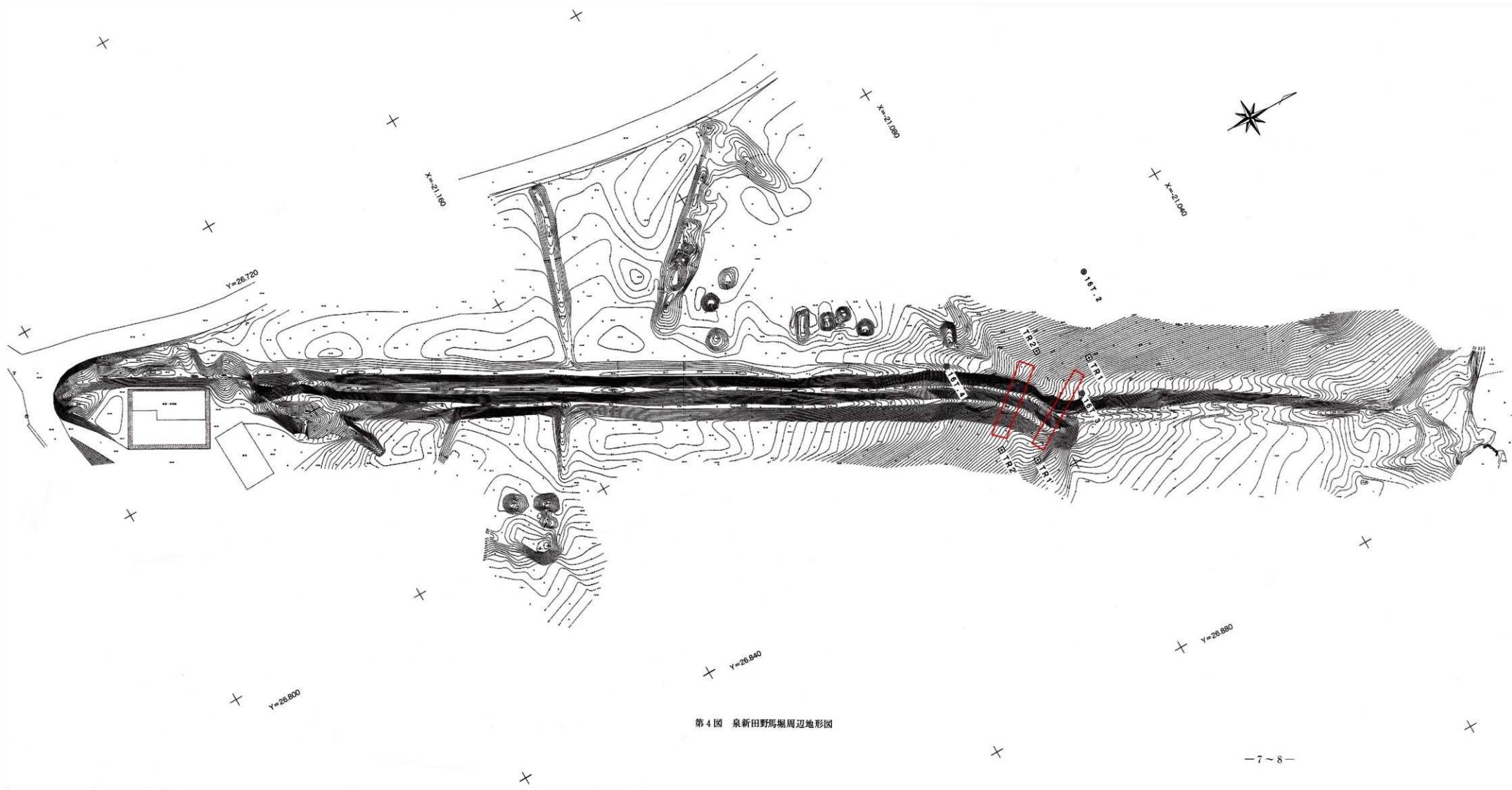
なお、泉新田野馬堀近辺では東側の谷を挟んで、一部造成などにより消滅しているが、割野馬土手が現存し、さらに周辺には南に少し離れて天王籠野馬土手や西には手倉山野馬堀や手倉野馬堀といった牧関係の遺構が良く知られている。このような事例からこの地域が江戸時代の印西牧の東端であり、新田開発により出現した村との境界であることを伺い知ることができる。

参考文献

- 青木更吉「印西牧」「小金牧 野馬土手は泣いている」論書房 2001
印西町史編さん委員会「印西牧」「印西町史」史料集 近世編4 印西町 1993
「印西市新井堀Ⅰ遺跡・新井堀Ⅱ野馬土手」（財）千葉県文化財センター 2002
「角川日本地名大辞典」編纂委員会「角川日本地名大辞典」12 千葉県（株）角川書店 1984
「割野馬土手」「年報No19」（財）千葉県文化財センター 1994
「千葉県埋蔵文化財分布地図(I)」（財）千葉県文化財センター 1997
土屋潤一郎「牧の経営」「房総考古学ライブラリー」8 歴史時代(2)（財）千葉県文化財センター 1994
渡辺孝雄「東金の鹿場と佐倉牧・小金牧」「図説 千葉県の歴史」河出書房新社 1989



第3図 泉新田馬堀地形測量図及び発掘区範囲図



第4図 泉新田野馬場周辺地形図



遺跡周辺航空写真(約1/10,000)



遺跡近景（南西から）



第1トレンチ（北西から）



第2トレンチ（西から）

報告書抄録

ふりがな	いすみしんでんのまほり						
書名	泉新田野馬堀						
副書名	千葉北部地区泉新田野馬堀埋蔵文化財調査						
巻次							
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告						
シリーズ番号	第492集						
編著者名	谷底 実一						
編集機関	財団法人千葉県文化財センター						
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809-2 TEL 043-422-8811						
発行年月日	西暦 2004年 3月 25日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
泉新田野馬堀	千葉県 印西市草深字大木戸 1878-3ほか	35 度 231 018	48 分 33 秒	140 度 07 分 47 秒	20030106~20030116	330m ²	造成整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
泉新田野馬堀	野馬堀	近世	野馬堀、野馬土手	なし	小金五牧の一つ印西牧の一部である。		

千葉県文化財センター調査報告第492集

泉 新 田 野 馬 堀

- 千葉北部地区泉新田野馬堀埋蔵文化財調査 -

平成16年3月25日発行

編集 財団法人 千葉県文化財センター

発行 都市基盤整備公団

印西市戸神501

財団法人 千葉県文化財センター

四街道市鹿渡809番地2

印 刷 株式会社 エリート印刷

成田市並木町44-20